



福を呼ぶ「高崎だるま」

高崎だるまは江戸時代から作られており、古い歴史があります。現在では年間約90万個出荷されており、全国シェアの大半を占めています。福にこだわり眉は鶴、髭は亀を表しています。

創作こけしは群馬から



伝統工芸の技術を生かしつつ、作家の感性が光る創作こけし。群馬県は林業県で木材が豊富なことから、多くの作家が工房を構えています。榛東村、渋川市、前橋市、吉岡町などで数多く生産されており、創作こけしでは日本一の生産量を誇っています。

群馬が生んだ家電量販店の王者



前橋市で創業し高崎市に本社がある「(株)ヤマダ電機」。平成14年に家電量販店として年間売上高が1位となり、平成22年には年間売上高2兆円を達成。現在も家電量販店日本一の座を守り続けています。

歴史ある絹産業の地・ぐんま

昔から養蚕が盛んだった群馬県では、明治時代以降、富岡製糸場など器械製糸工場で作られた生糸が日本の主要品目としてヨーロッパを中心に輸出され、日本の産業の近代化に大きく貢献しました。

養蚕農家が蚕を飼育して繭を作らせる養蚕業、繭から生糸を作る製糸業、糸を染め織り上げる織物業、そして良質な絹織物を取り引きする商業が栄え、群馬は日本の絹産業をリードする地域となりました。



●国指定伝統的工芸品の「伊勢崎^{かすり}紺」と「桐生織」

「伊勢崎紺」の歴史は古代までさかのぼります。東京の女学生の制服に使用されるなど、明治、大正、昭和にかけて「伊勢崎^{めいせん}銘仙」とよばれ全国的に知られていました。「伊勢崎紺」として国の伝統的工芸品に指定され、守り伝えるべき文化として継承されているほか、近年では、その製造技術を応用し、反物以外にインテリアや産業資材向けの製品が生産されるなど多様化が図られています。

一方桐生織は、鎌倉時代末の新田義貞の旗揚げや、1600年の関ヶ原の合戦で徳川家康が桐生の^{しらぎぬ}白絹の旗を用いたことなどから、その名を全国に広め、産地である桐生は江戸時代に「西の西陣、東の桐生」と呼ばれるほど、日本を代表する織物産地となりました。さらに19世紀前半には、金襴^{きんらん}や糸錦のような高級織物を生産するようになり、この技術・技法は現在の桐生織に引き継がれています。桐生織は和装に限らず洋服の生地(テキスタイル)にも応用され、現在も桐生産地を支えています。



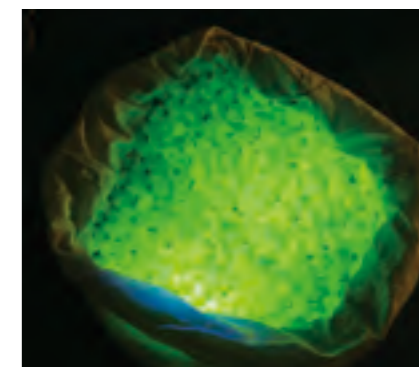
伊勢崎紺



桐生織

●ぐんまの繭を未来へつなぐ

群馬県は、繭の生産量が全国の約4割、生糸の生産量が約6割を占める全国一の養蚕県です(23ページも見てね)。県では、繭糸の太さや色のほか、糸のほぐれ易さ、染色性の良さなどにおいて特長のある、独自に開発したオリジナル蚕品種を活用した「ぐんまシルク」のブランド化や、世界初となる養蚕農家での「緑色蛍光シルク繭」の生産など、養蚕業の未来のための取り組みを進めています。



緑色に光る蛍光シルク繭